

特集

子どもと風

風の声が聞こえる

桐ヶ谷まり

見ること、つかまえることもできないのに、風は確かなものを運んできます。

実体はないのに、実感を連れてくる。

長い間取り組んでいた問題が片付いてほっとした時、ふと街角で立ち止まり、風に身を任せていると、やれやれ、また一つ無事に峠を越えたね、と風がささやくのです。

風は、はるかな昔から吹いていて、そうして常に新しい。

私は（ずいぶん昔に）最初の子どもを授かったころ、何とも不思議な感覚を味わいました。「おめでたですよ」と告げられて医院を出た時、通りを行き交う人々がみんな人の子だ、と気づいたのです。

みんなこうして、同じように母親のお腹に宿り、生まれてきたのだ——そう思ったらめまいがしそうになりました。見慣れた光景が、いきなりベールをはいだように鮮明に見え始めたのです。

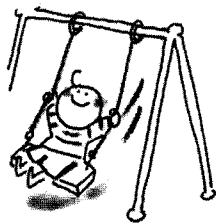
連綿と続いてきたこの人の世に、私はあの時から

参加したような気がします。それまでは、自分のことしか考えていなかったし、別にいつ死んでもいいやと思っていました。

生まれたばかりの赤子を抱いて、その小さな口にお乳を含ませ、母親になった喜びに涙する女の汗ばんだ額に吹く風は、何千年前も今も変わりません。

子どもは風の子、と昔から言われています。

いずれはテレビゲームやパソコンに熱中する子どもたちも、幼いうちは外へ出たがり、暑くても寒くても外で遊びたがるようです。



シーソーも、ぶらんこも、すべり台も、風と戯れる遊具です。

自分の体の重みを頼りに、空中を上下左右に揺れて、滑って飽きることがない。単純な反復のようですが、速度を調節すれば風景はめまぐるしく変わり、風も変わります。

そよ風からつむじ風まで、思いのまま。

ぶらんこを目いっぱいこげば、空に吸い込まれそうになるでしょう。

凧も、こいのぼりも、風船も、風鈴も、シャボン玉も、風の力を借りています。風がないのにたまりかねた子どもは、小さな風車を掲げてそこら中を走り回り、自ら風になってしまっています。

末娘が三歳の秋、向かい風に両手を広げ、口を大きく開けて、「水の味がする」と叫んだことがありました。同じころ、庭でしいたけを栽培していま

したが、豊作だったので干しいたけを作ろうと思  
い、末娘と二人で生しいたけを細く割り、ざるに並  
べて天日乾しにしました。

「なぜ干すの?」「おいしくなるから」「甘くなる  
の?」「風味が増すの」「フーミって、なあに?」

「フーミはね、風が作る味」

私は困ってそう答えました。

人生が長くなるほどに、子ども時代はその輝きを  
増すことになるでしょう。

公園のベンチに座って、若い母親たちが子どもを  
遊ばせているのを眺めている老人は、目の前の光景  
の向こうに、自分の子どもを育てていた若き日々  
を、さらに、自分自身がぶらんこに乗っていた幼い  
日々を、透かし見ているに違いありません。

私の古里は山梨の小さな村ですが、幼いころの思

い出の中にはいつも風(甲州のからっ風)が吹きぬ  
けています。

村の一番はずれにあったわが家の窓を開けると、  
見渡す限りの緑の麦畑で、大風の日には麦の穂が一  
斉に傾かいでうねるように波打ち、はるか彼方までそ  
の波が連なり続いていきます。小さかった私は、小  
人が大勢手をつないで横一列に並び、麦畑を駆けて  
いく姿を想像しました。

季節が移ろい、そこが濃いピンクのレンゲ畑に塗  
り替えられると、友達とおやつを持って遊びに行き  
ました。レンゲ畑には小川が流れ、池があり、そこ  
にビニール袋に入ったみつ豆を沈めて冷やして食べ  
るのです。そのひんやりした薄甘いみつの味が、私  
の幼年時代の味でした。

池にはカニやザリガニがいて、夢中になって遊ん  
でいると、私の名前を呼ぶ声が風に乗ってとぎれと  
ぎれに聞こえてきます。立ち上がってみると、あた

りは暗くなりかけていました。

遠くの四角い窓の中に母の顔が白く浮かんでいます。空で風がピューピュー鳴り、私は急に怖くなりました。

風は、事件の前ぶれです。そしてヒーローは、風と切っても切れない間柄のようです。

スーパーマンやパーマンは空を飛ぶことができますが、月光仮面のおじさんや怪傑ゾロリなどは、飛べないのにマントを羽織っています。

風の子の末裔である証拠のように。

マーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』

(原題Gone With The Wind) は、原作も映画も素晴らしい名品です。友情も、恋愛も、戦争も、貧困も、三度の結婚も経験する気の強い美女の半生を描ききっておきながら、まるで何事もなかったかのよ

うな題名で、この題名が物語に普遍性を与えています。諸行無常。

子どもにかかわりのある人が真つ先に思い浮かべるのは、何といつても、宮澤賢治の『風の又三郎』でしょう。

風というとらえどころのない自然現象を、これほどわかりやすく生き生きと、手応えあるものにまとめ得た文学は、古今東西どこにも見あたりません。

賢治の自然に対する畏敬の念と愛情の大きさ、それを平易な言葉だけを用いて現実に置き換える描写力、全体の構成の巧みさは、比類がありません。

『風の又三郎』は、風の音で始まります。

「どつどつ どつどつ どつどつ どつどつ

ああまいりんごも吹きとばせ

すっぱいりんごも吹きとばせ

どつどつ どつどつどつ どつどつどつ どつどつどつ

山奥の小さな村の小学校に、夏休み明けの九月一日、転入生がやって来ました。

「ゼンたいその形からが、じつにをかしいのです。へんてこな、ねずみいろのだぶだぶの上着を着て、白い半ずぼんをはいて、それに赤いかはの半靴をはいてゐたのです。

それに顔といつたら、まるでじゅくしたりんごのやう、ことに目は、まんまるでまつくるなものでした。」(59頁)

彼には高田三郎という名前があるのに、友達はずからともなく「風の又三郎」と呼び始めます。彼が何かするたびに風が吹くからです。一緒に勉強したり、野山で遊んだりするうちに仲良くなりますが、

別れは突然訪れます。ひどい風の日でした。

「外はもうよほど明るく、土はぬれて居りまして。家の前の栗の木の列は、へんに青く白く見えて、それがまるで風と雨とで、今せんたくをするとてもいふやうに、はげしくもまれてゐました。

青い葉も幾枚も吹きとばされ、ちぎられた青い栗のいがは、黒い地面にたくさん落ちてゐました。空では、雲がけはしい灰色に光り、どんどんどんどん北の方へ吹きとばされてゐました。」

(146頁)

嵐の様子がありありと浮かぶ、簡潔にして非凡な文章です。画才や楽才も見え隠れしていますが、誰にでもわかる基本的な単語を野蠻なほど実直に組み合わせて、まったく新しい世界を作り出す——これこそ文才というものでしょう。

この嵐から、又三郎の退場を予感した子どもたちは、早々と学校へ行き、先生に又三郎は今日来るのかと尋ねます。先生は、ちょっと考えて「又三郎って、高田さんですか」と言い、昨日お父さんとほかへ行ってしまったと教えてくれます。嘉助という子が、「先生、飛んで行ったのですか?」と聞くと、先生は「いいえ、お父さんが会社から、電報で呼ばれたのです」と答え、会社の事情も説明してくれますが、嘉助は高く叫びます。

「さうだないな。やつぱりあいつ風の又三郎だったな。」(151頁)

わずか一ページのこの短いやりとりの中に、大人と子どもの対比がくつきりと浮かび上がります。常識対非常識、理屈対直感と言ってもいいでしょう。そして、読者は妙に納得してしまふ。嘉助と共に「やつぱり!」と心の中で叫んでしまします。

宮澤賢治は三十八歳で世を去り、生前は本が一冊出版されただけでした。農業の研究に身を捧げた賢治は、偉大なる風の子でした。

本当に素敵なことは、過ぎ去って二度と戻らない(しかしお金で買えない)ものばかり。

フジコ・ヘミングさんのピアノの音色も、いちずな恋も、赤ん坊の肌の匂いも、吹きさらしの庭でお話をした時の恩師の澄んだ瞳にも、もう出会うことはありません(CDもあるけれど生の演奏は一期一会、赤ん坊はみるみる大きくなり、大好きな先生は向こうへ行ってしまった)。

でも、似た風が吹けばきつと思ひ起こすのです。あの至福が、まざまざとよみがえる。

風は、一瞬と永遠の間隙を、かるやかにすりぬけてしまうのでしょうか。

(エッセイスト)